

生まれ変わる繊維問屋街

名古屋市中区錦二丁目の地域マネジメント

伊藤 彩子

名古屋市中区錦二丁目とは戦後、長者町繊維問屋街として発達した地区である。北を地下鉄丸の内駅、南を地下鉄伏見駅に挟まれた交通至便な立地であるが、特にバブル崩壊以降は繊維産業の衰退が進み、空きビルが増え、風俗業の進出、軽犯罪などが起こるようになった。このような状況への危機感から、新しいカラーを街に付加するためのエリアマネジメントが開始された。

問屋街に一般人を呼ぶ

きっかけは二〇〇〇年に行われた、長者町繊維物協同組合の設立五十周年行事。問屋街に一般人を呼ぶことへの抵抗感を示す人々を説得して、問屋の商品やフリーマーケットブースが路上に並び「長者町五十年祭」を実施したところ、二日間で六万人の人が訪れた。この成功によって長者町の人々の間に、「賑わいを取り戻したい」という気持ちが高まったという。そして、このイベントは翌年から「多びす祭り」という恒例行事となった。

次に取り組んだのが、問屋の廃業後に残された空きビルの活用。有志十人がお金を出し合って有限会社を設立し、空きビルをまるごと借り上げて改修。カフェやインテリアショップなど、若者向けの小売・サービス業を入居させ、「多びすビル」という名前をつけて運営を行った。二〇〇五年までに三棟の空きビルが再生され、これによって長者町に人の流れが生まれ、飲食店が増加するようになった。「多びすビル」の発展形と言えるのが、「伏見・長者町ベンチャータウン構想」である。これは、空きビルをリニューアルして、デザイン、ファッション、デジタルコンテンツ産業などの都市型産業のインキュベーション施設をつくるというもので、建物改修費用と入居企業の賃貸料の一部を名古屋市が補助する。この制度は、地元と名古屋市が意見交換する中で生まれてきたアイデアが形になった。

のぞきビルの一階に飲食店が増加しても、中高層階は活用されない場合が多いため、この方法によって中高層階を有効利用する狙いがあるという。二〇〇六年以降一棟ずつ増え、現在三棟が完成している。これらの取り組みによって、プロの業者を相手としていた問屋街に、一般人を対象としたファッションナブルな小売店舗やサービス業、新産業のインキュベーション機能という新しいカラーが付加された。

錦二丁目まちづくり連絡協議会の発足
取り組み内容の発展に並行して、運営体制も進化している。当初は「名古屋長者町繊維物協同組合」が母体であったが、二〇〇四年には「錦二丁目まちづくり連絡協議会」が発足。会員として、繊維問屋だけでなく地域の多種多様な企業、住民を受け入れることを目指しており、会費や寄付金によって運営されている。この組織の発足により、地域に関係する様々な立場の人々が意見を出し合いながら未来のまちの姿を考えていく基盤ができた。

この連絡協議会が発足してから、事例見学会、学識者や行政職員を招いての勉強会、まちづくりワークショップなどを積極的に実施し、知識の習得や合意形成を進めている。二〇〇六年には、地区内に短歌会館があることにちなんで、公募し

た短歌によって構成される「錦二丁目まちづくり憲章」を、愛知産業大学大学院の延藤教授の指導のもとに作成。さらに、現在は「まちづくりマスタープラン」の作成に取り組んでいる。また、延藤教授が代表理事をつとめる「NPO法人まちの縁側育み隊」が運営する「錦二丁目まちの会所」が開設され、学生による提案の展示や、まちづくりの相談所として機能している。

錦二丁目では、長期的には「街のマネジメント会社」の設立を目指しており、それによってコミュニティを再生し、安心・安全な住環境の確保を行うとともに、街全体を計画的に発展させていきたいと考えているのである。

新しいカラーの確立に向けて

錦二丁目では、繊維問屋街に代わる新しい街のカラーを獲得するためのエリアマネジメントが進められている。まだはつきりとしたカラーの獲得には至っていないが、新たな業態や産業が生まれ、街の人同士のつながりが再生しつつある。長期目標は、マスタープランにもとづく、再開発も含めた街の再活性化であるという。「長者町五十年祭」以降、着実な取り組みを積み重ねている錦二丁目の今後の展開が楽しみである。



資料錦二丁目まちづくり連絡協議会ホームページ
http://www.kn2.jp/index.html

栄に求められるエリアマネジメント

井澤 知旦・伊藤 彩子

栄は魅力的個性を持った複数の地区で構成されている。これまで、栄から名古屋の文化が作り出され、情報発信されてきた。これからも栄がその役割を担いつつ発展していくためには、各地区の個性を磨きつつも、それらが連携して、栄全体の魅力を引き出すエリアマネジメントが求められる。

セントラルタワーズの登場

栄は、戦前から名古屋文化の中心を担ってきたエリアであるが、その地位は現在揺らいでいるのではない。二〇〇〇年のJRセントラルタワーズのオープン以降、高層ビルが林立し、栄が従来担ってきた都市機能の一部を名古屋駅が担うような状況が発生している。これからは栄といえども、安穩としておれない。名古屋駅とのいい意味での競争により、個性の強化や補完の関係づくりなど、栄エリアの対策を考える時期にきている。

栄にあるが、名古屋駅にないもの

栄にはあるが、名古屋駅にはないものが、たくさんある。最大の違いは、久屋大通に代表される公共空間の充実である。久屋大通、まちなかの公園、歩道の樹々がゆつたりとした雰囲気を提供し、季節を感じさせるとともに、公共空間がイベント会場となることで、まちの活気に貢献する。さらには、名古屋城下町から始まった四百年の歴史や芸術文化センターやナディアパークなどの文化施設で多様な文化的催事が行われることもそうである。狭い範囲に林立する高層ビルによって、効率性を提供する名古屋駅に対して、栄は憩いや語り、刺激など時間消費性を提供する。

これからは、このような潜在的な強みも、栄が十分に発揮していくような取組みが必要である。それはつまり、恵まれた環境と消費の場を有機的につなぎ、多様性があるながらも、全体として心地のよい上質な空間づくりをすることである。具体的には、公園と買い物空間との新しい関係をつくることも、栄全体として緑を増量しながら演出し、美しい景観をつくっていくこと。オープンカフェや、イルミネーションの演出など、良好な環境を一層魅力アップするソフト事業を全体で行うこと。埋もれている歴史に光を当て、人々の散策ルートに変えること。栄らしい、文化的なイベントを行っていくこと。このような対策がイメージできようか。

個性を出しつつゆるやかな協調を
しかし、栄全体での取り組みを行っていくためには、様々な課題がある。第一に、これまで互いに競い合ってきた各地区の個性の尊重と、全体の協調とことである。そのためには、各地区の個性を尊重しつつも、連携する相乗効果をいかに発揮していくのかを考えなければならぬ。

第二に、二〇〇六年に、栄の住民、企業、行政機関などによって「魅力あふれる栄地区推進協議会」が設立され、まちの安全性の確保や魅力の向上についての検討が重ねられているが、このようなまちづくりの主体として、地元の人々や企業がどれだけ自分自身の問題として捉え行動するのかという課題である。

栄がこれからも名古屋の中心として地位を保ち続けられるという保証はない。栄のブランド力を磨くため、エリア全体をマネジメントしていくような組織をつくり、話し合いの場を持つていくということが必要であると考えられる。